



新疆師範大学と千葉大学との大学間交流協定の締結なる

学長一行が CEReS を訪問、新疆からの留学生と懇談

2010年5月10日、中国新疆ウイグル自治区新疆師範大学から Azat Sultan 学長はじめ6名が千葉大学の齋藤学長を訪問し、両学長は大学間交流協定書に署名、調印を行った(写真1)。

当日午前中、一行6名は環境リモートセンシング研究センターを訪問し、最新実験設備を見学した後、千葉大学在籍の新疆からの留学生9名を交えて意見交換を行った(写真2)。

交流協定締結後、新疆師範大学側から早速、リモートセンシングと物理の分野の交換学生を千葉大学に送りたい旨の申し出があり、今後の交流拡大への弾みとなった。

日本での最終日である5月13日の夜、一行を東京の和食レストランに招待し、互いに交流を楽しんだ。本学の新倉国際教育センター長も参加したこの席でも、今後の相互の活発な交流活動に関する協力の相談が行われた。

今回の新疆からの Azat Sultan 学長以外の訪問者は次のとおりであった。Zhang Bin 国際交流所 所長、Hua Jin Mu 国際文化交流学院院长、Ma Feng Qiang 科学研究管理所(研究予算管理) 所長、Nadila Abudureheman 国際交流所通訳、Alimjiang Kasimu 研究生所(大学院) 副所長で

ある。(建石隆太郎)



写真1 齋藤学長(前列左から2人目)、Azat Sultan 学長(同3人目)と関係者による大学間交流協定締結後の記念撮影



写真2 新疆師範大学学長一行と新疆からの千葉大学在籍の留学生を交えて、CEReS 内での懇談

2010年度 CEReS のスタッフと学生現況

CEReS 教員が主として指導する大学院及び学部4年生を含めた2010年度の CEReS の人員構成は、次ページの表に示すようになった。専任教員から研究補助員まで含めた研究関連スタッフ

が40名、研究生を含む学生総数は101名である。表1の最下段に示した数は、その内の外国人数であり、学生では、半数近い46名(研究生含む)が留学生(大学院学生の丁度半数)から構成され

ている。ほぼ全員アジア中東出身者であり、リモートセンシング分野における研究の必要性と期待の高さを反映していると言える。

例年、年度初めに CEReS 在籍の教員、スタッフ等及び学生全員による「顔合わせ会」があり、今年度は5月20日松韻会館にて18時より実施された。67名の参加を得て、研究室単位の紹介や交流が、軽食をつまみながら和やかな雰囲気の中で行われた。(高村民雄、写真提供：ヨサファット教員委員長)



写真3 5月20日に開催された CEReS 顔合わせ会の様子。挨拶は久世センター長の様子。

表1 2010年度の CEReS のスタッフ及び学生総数。下段のイタリック数字は外国人内数。

専任教員	客員教員	特任教員	グラントフェロー	外国人研究員等	非常勤研究員	協力研究員	研究補助員	秘書	研究生	D3	D2	D1	M2	M1	B4	学生数合計	総計
11	3	4	1	1	3	17	3	5	14	12	8	9	21	14	23	101	149
1	0	1	0	1	2	5	0	0	14	5	5	9	8	5	0	46	56

(注：「客員教員」は寄附研究部門担当教員を指す)

哀悼 石橋博良 寄附研究部門客員教授

5月22日に、石橋博良千葉大学環境リモートセンシング研究センター客員教授が逝去されました。ここに、環境リモートセンシング研究センターの職員一同を代表して深い哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

古在豊樹千葉大学前学長の紹介に端を発し、平成20年10月から、CEReSに地球温暖化と交通・気象情報に関するウェザーニューズの寄附研究部門が開設されました。それ以来、CEReSでは石橋客員教授を含む3人の寄附部門教員とともに、リモートセンシング研究と気象情報の共有化、研究成果の社会への還元に関して多角的な共同研究を展開して参りました。

石橋客員教授の前向きな姿勢は、大学の研究センターで日々の研究活動を行っている私たちに色々な意味での刺激となりました。とくに、気象・気候情報を含む環境情報を、どのような道筋で人々の日々の暮らしや生活に活かしていくか、

という大切な視点への問いかけをもたらして頂いた功績は大きなものがあります。



私ども千葉大学環境リモートセンシング研究センターの教職員一同は、今後も寄附部門でのさまざまな協同作業を通じて、石橋客員教授が切り拓いて下さった産学の連携を発展させるべく、努力を続けて参る所存です。6月9日には、第2回の寄附研究部門公開シンポジウムを千葉大学けやき会館で開催し、多くの参加者の方々とともに石橋客員教授の功績を偲び、あわせて今後のあるべき共同研究と、その成果の活用の方向性について有益な議

論を行ったことをここにご報告し、石橋客員教授への追悼文とさせていただきます。

(センター長 久世宏明)

モンゴル出張報告

SKYNET Mandalgobi サイトの保守・管理と、モンゴル科学技術大学とセンターとの学術交流協定の延長に関する覚書交換の為に、2010年4月24日～5月5日の間、モンゴル・ウランバートル及びマンダルゴビに出張したので、モンゴルの近況を含めて報告する。

4月終わりのウランバートル(UB)はまだ日によっては日本の冬の天気近く、到着翌日も日差しはあるものの終日零度を越えず、肌を刺す冷たい風が吹きつけた。山の一部に残雪が所々に見える。それでも春を感じさせるのは、UBからマンダルゴビへ向かう途中、標高1700m前後の峠で、舗装されていない路面は残雪の一部が融けてすっかりぬかるんでおり、数少ない川には雪解けの水が見えることである。さらに、UBから南へ280kmのマンダルゴビでは、日中20℃近くなることもあり、寒暖の厳しい乾燥地の内陸気候そのものを実感出来る。



写真4 ウランバートル市内中心部(川向こう)を望む。川に4月後半でも氷が張っているの見える。

モンゴル科学技術大学では、マンダルゴビサイトの維持管理と共同研究相手のTugjsuren教授と共同研究に関する意見交換を行い、その後学科長のMunkhbaatar教授と覚書の交換を行ったのち、副学長のDavvsuren教授をTugjsuren教授の紹

介で表敬訪問した。工業経済が専門の副学長は、モンゴルではこれから軽工業を発展させる必要があり、その人材養成が重要だと指摘、また日本と同様、財政の悪化による政府の大学支援が年々細くなり、外部資金の獲得が重要だが、それもなかなか難しくなっていると話しているのが印象に残っている。



写真5 SKYNETマンダルゴビ観測サイト。マンダルゴビ空港気象台の観測露場の一角にスカイラジオメータが設置されている。器材の向こう側に滑走路があるが、舗装はなく気をつけないと分からない。周辺は、こうした半砂漠が広がっている。

経済発展につれて、少しずつ市内の様子も変わりつつあり、市街域も訪問のたびに拡大して、クレジットカードの使える店も増えている。しかし、牧畜と天然地下資源に頼る経済は、今冬の寒波による数百万頭にのぼる家畜の死による打撃が大きいようだ。また、人口集中による自動車の増加は深刻な渋滞を引き起こし、盆地の底にある市内の大気汚染状態は深刻さを増していることは間違いないようだ。

(高村民雄)